みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

失敗した比較：監査と類化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001070

出口顯・三尾稔編『人類学的比較再考』
国立民族学博物館調査報告　90:227-246(2010)

失敗した比較
── 監査と類化 ──

中川　敏
大阪大学大学院人間科学研究科

当論考は，現代社会における比較の中で最も影響力のある監査複合（「監査文化」）をめぐる考察である。エスノメソドロジーのキーワード「アカウンタビリティ」が「大きい述語」による記述であるのに対し，監査文化のキーワード「アカウンタビリティ」（「説明責任」）が「小さい述語」への還元であることを指摘する。すなわち，監査文化は，比較し得ないものを比較する試みなのである。それが間違った比較であるにもかかわらず，監査文化は現代の社会に浸透する。その比較の試みが伝統社会に及ぶとき，伝統社会は比較可能なものとして，すなわち共約可能なものとして，「類化」される。それは共通の差異の構造の表の中に埋め込まれるのである。類化は，外側からのみ行なわれるのではない。それは内側から，「原住民」の側からも行なわれる。人類学で脚光を浴びていた「文化の客体化」は，けっきょく，このような類化であることが示される。「原住民」によるローカルの強調は，グローバルな秩序の中で意味があるときにのみ許されるのである。「文化の客体化」として描かれる現象は，グローバルな秩序があらかじめ用意した共通の差異の構造の表の中に，「文化的特殊の一般的事例」として組込まれるのである。

1　プロローグ―行政都市エンデ
2　比較，離床，博物学―伝統と近代
　2.1　離床―近代の誕生
　2.2　自然の離床―博物学の誕生
　2.3　経済の離床―合理性の誕生
　2.4　近代化―還元の野望
3　近代の博物学―監査
　3.1　言語ゲーム―大きなアカウンタビリティ
　3.2　世界の近代化―小さなアカウンタビリティ
　3.3　大学の近代化―代替可能性
4　伝統の博物学―類化
　4.1　先住民の知恵―文化の解体
　4.2　インド―文化の客体化
　4.3　ベリーズ―文化の展覧会
　4.4　チャンブリ―文化の目録
5　エピローグ―エンデ県知事選挙

＊キーワード：離床，アカウンタビリティ，言語ゲーム

統計的な意味でであるとか，
書かれたものという意味でであるとか，
証拠があるという意味で，
事実であるような物事がある。
そして
それらが事実でしかあり得ないが故に，
そうでなければ世界の意味が通らないが故に

事実であるような物事もある。
――

『プレイバック』（レイモンド・チャンドラー）

1　プロローグ――行政都市エンデ

2007年１月，インドネシアの地方新聞に，わたしの調査地の近くの町，エンデの町（コタ・エンデ）が「行政都市」（プムリンタ・コタ）に格上げされるかもしれないという，地方政府要人の談話が掲載された。わたしはインターネットでその記事を見たが，気にもとめていなかった。

その年，９月にわたしは調査地の村，ズパドリ村に赴いた。村はその話で盛り上がっていた。それまで村で行政レベルの政治の話がされることは滅多になかった。しかし，その年のわたしの３週間の滞在の間のもっともホットな話題は，エンデの町の行政都市への格上げ問題であり続けたのだ。じっさい，９月24日には県議会への村人による反対デモが行なわれた。なぜ自分たちがエンデの町の行政都市への格上げに「反対」なのかを，はっきりと意識していた村人は少なかった。またそれなりに理由を意識していた人の間にも，その理由に関して合意が形成されていたとは思えない。

ここで，ズパドリ村の上記の状況を理解できるだけの村をとり巻く政治的な（とりわけ行政的な）背景を説明しておこう。

わたしが滞在した村，ズパドリ村は，インドネシア東部，フローレス島の中部に位置する。村は，行政的にはヌサ・トゥンガラ・ティムール州，エンデ県（カブパテン・エンデ）に属する。エンデ県の県庁所在地（イブ・コタ）はエンデの町（コタ・エンデ）である。「行政都市」（プムリンタ・コタ）は，州の下で県に相当する地位を持つ。すなわち，もしエンデの町が行政都市に格上げされることになると，町はエンデ県からは独立することとなるのである。そしてエンデ県の県庁所在地はどこか別の所に捜されねばならなくなる。

エンデ県には二つの「民族」が住むとしばしば語られてきた。その「民族」とは，県の東側（おそらく４分の３ほどの面積を占める）に住むリオ人と，県の西側に住むエンデ人とである。人口の割合は，ほぼ面積に比例し，リオ人がエンデ人の三倍ほどである。植民地化の中で（統廃合を経て，最終的に）リオ人の間に二つの王国，エンデ人の間に一つの王国が存在した。しかし，住民の間には王国統治によるアイデンティティはほとんど（とりわけエンデ人の間には）存在しない。「民族」の区分は，王国というよりは，むしろ言語によるものである。リオ語を喋るリオ人とエンデ語を喋るエンデ人というわけである。二つの言語の間には，しかしながら，方言程度の差異しか見ることはできない。

エンデの町自体はエンデ人の領域に属しているが，その東端にあり，エンデとリオの二つの「民族」領域のほぼ境界に位置している。現在，エンデの町の居住者の多くは（リオ人を筆頭とする）他所者であり，彼らはインドネシア語を日常的に使用している。エンデの町の「民族」別による統計はないが，公務員，役人を含むエンデの町の人口のかなりの部分がリオ人によって占められていることは確かであろう。

わたしの調査地，ズパドリ村はエンデ語の領域，すなわちエンデ県の西側，エンデの町から20キロメートルほど西の山岳地帯に位置している。村人の日常においては，リオ人との接触はほとんどない。彼らはエンデ語を喋るという意味で「エンデ人」ではあるのだが，彼らがそのように名乗ることはめったにない。ズパドリ村の人びとにとって最も身近な「民族」の語りとは，「わたしたち『山の人』」対「彼ら『エンデ人』」である。この場合の「エンデ人」とは，海岸部に住むイスラム系の住人を指す。この対立の中では，彼らズパドリ村の住民たちは「エンデ人」でさえないのである。対立は「民族」間にではなく，「宗教」間に求められることが多い。村人の日常にはエンデ人対リオ人という対立はほとんど顕現しなかったのである。

＊　＊　＊　＊　＊

2007年，エンデの町が行政都市になるという噂をきっかけに「民族」対立が取り沙汰されるようになった。既に述べたように，デモの目的に関して人びとは曖昧なままであった――エンデの町が行政都市になることにたいして反対という点は明らかではあるが，何故反対するのかが曖昧なのである。

行政都市問題にはいくつかの語り方が存在していたのだ。一つはニュートラルな語り方である。この語り口だけがなされるとき，村の住民にとっては行政都市問題に反対する理由は，とりたてて，ない――そのような意味で「ニュートラル」なのだ。この語り口の中では，エンデの町の行政都市格上げは，1998年以来のインドネシアの地方自治優先の脈絡に置かれる。地方自治の流れの中で，村人に最も身近な影響は，ムッカル（行政単位の分立）である。州が分割され，県が分割され，郡（クチャマタン）が分割され，そして行政村（デサ）が分割されていく傾向である。ヌサ・トゥンガラ・ティムール州にはティモール島，スンバ島，そしてフローレス島と三つの大きな島がある。ここ数年の間，フローレス島が一つの州としてヌサ・トゥンガラ・ティムール州からムッカルするという噂が流れている。そのためには州都が必要である。州都の有力な候補地は二つある――フローレス島の大きな町であるエンデの町と（隣の県，シッカ県の県庁所在地である）マウメレの町である。今回のエンデの町の行政都市への格上げは，エンデの町を未来のフローレス州の州都とするその一ステップである，というのである。この語り方の中で，エンデ県は，隣のシッカ県と対立して描かれる。それはエンデ人とシッカ人との「民族」の対立なのである。

行政都市問題を語るもう一つの仕方[1)]，おそらく最も人びとの関心をひいた語り方が，エンデ人とリオ人の対立の図式を用いた語り方である。その語りかたによると，エンデの町の行政都市としての独立はリオ人の陰謀だというのである。もともとエンデ人の町であり，またエンデ人の領域の中にあるエンデの町を，エンデ県から独立させることによりリオ人のものとする，リオ人による陰謀である，というのだ。

ある老人はなげいた――「おれたち，エンデ人とリオ人は今迄こんなに仲がよかったのに。なぜなんだ。エンデ・パウェ／／リオ・サレと言うではないか」と。この対句法による儀礼言語は「麗しいエンデ／／美しいリオ」と訳すことができよう。対句法は，たしかに，エンデ・リオの儀礼言語の特徴なのだが，わたしは，「エンデ」という語と「リオ」という語が対にされたのは，それまで聞いたことがなかった。エンデ人とリオ人の対立は，儀礼言語の中に固着されるまでに至ったのである。

この「民族」対立が浮き彫りになってくる中で，いままで誰も気にもしていなかったさまざまな事実（あるいは事実とされているもの）が村人の会話の中で指摘されるようになった。県の行政のトップである県知事，副知事，書記長，すべてがリオ人であること，ほとんどの役所の長がリオ人であること，役所の事務員もまた多くがリオ人であること，等々が語られる。リオ人がそのような地位を持つに至ったのは，リオ人の勤勉さのゆえである。その勤勉さは，ズパドリ村の人びとは語る，強い階層構造を持つリオ社会の一つの帰結であろう，と。そして，村人たちは次のように続ける――エンデ人はその自由な気風から，強い階層構造を嫌がり，エンデ人の社会構造はより平等主義的なのだ，そしてそれが故にエンデ人は階層構造の中の公務員には不向きなのだ，と。

エンデ人とリオ人の対立は，クブダヤアン（文化）の比較として語られるのである。それは，わたしが今迄聞いたことのないような語り口であった。

行政都市問題に関する上記の二つの語り口が融合し，エンデの町が行政都市となり，フローレス州という新しい州の州都となり，その後，エンデ県が二つの県（エンデ県とリオ県と）にムッカルする，というのも，村人が好んでする語り方であった。一つの行政単位（県）には一つの文化，というわけである。

＊　＊　＊　＊　＊

この突然に現れたズパドリ村の「民族」語りを理解するための理論的な道具立てを用意するのが，この論文の目的である。その道具立ての中で，「民族」語りはズパドリ村に起きたグローバル化であることが示される。一見，「民族」語りはローカルの特殊性を強調する，グローバル化とは逆の方向を目指す動きに見えるかもしれない。しかし，ズパドリ村の村人は自らの意図とは無関係に，グローバル化の枠組みの中に捉えられつつあるのである。

2 比較，離床，博物学 ── 伝統と近代

フーコーは十六世紀から十七世紀への西洋のエピステーメーの転換を描く中で，次のデカルトの『精神指導の規則』からのパッセージ（規則第14）を引き，比較の重要性を説く ── 「人間理性のはたらきはほとんどすべて，この比較という操作を可能にするところにある」［フーコー（1974）：78］。

比較は，デカルトによれば，二種類だけであるという。一つは計量的な比較と，秩序の比較である［フーコー（1974）：78］。人類学自身の比較は秩序の比較であるべきであろう。しかし，人類学の対象とする人類社会は，いまや，計量的比較を比較の唯一の方法として展開しつつある。そして，その方法は人類学の対象とする社会（「伝統社会」と呼ぼう）だけではなく，人類学者自身の社会（「近代社会」と呼ぼう）にも蔓延する。この論文は，人類学の方法としてのあるべき比較について論じるのではなく，社会において「原住民」たち（このカテゴリーには人類学者も，いやおうなしに含まれる）が行なう比較について述べることをその目的とする。

デカルトの言うところの計量的比較，あるいはその発展した比較法は，伝統社会に見いだされるとき，「文化の客体化」（［Handler（1984）］）あるいは「類化」（generification）（［Errington and Gewertz（2001）］［Delcore（2004）］）と呼ばれ，近代社会に見いだされるとき，「監査文化」（audit cultures）［Strathern（2000b）：4］と呼ばれる。類化にせよ，監査にせよ，ともに，それまで（少なくとも単純な方法では）比較不可能とされてきたものを（単純な方法で）比較可能とする語り方を提供するものである。エンデ文化とリオ文化とが単純な方法で比較可能なものとなり，大阪大学と国立民族学博物館が単純な方法で比較可能なものとなるのだ。それは，順位をつけることを可能にするほどの単純さである。大学ランキングはすでに「当り前」のものとして通用している。文化ランキングが「当り前」のものとして通用する悪夢の社会は（「悪夢」という名の）夢物語ではないのかもしれない。

2.1 離床 ── 近代の誕生

この論文全体の議論の土台となるのは「離床」の考え方である。その議論の詳細はすでに別の論文「コスモスからピュシスへ」［中川（2008）］で述べたが，ここで簡単にその内容を紹介したい。

十七世紀以降の西洋をその起源とする近代の言語ゲームの一つの特色は，社会をいくつかの領域に分けて語る仕方である。デュモンは，宗教が独立し，その宗教が政治的なものを生み出し，そして政治的なもののあとに経済的なものが生まれていくという「近代の系譜」［デュモン：156］について語った。とりわけ重要な独立としての，経済の社会からの独立，すなわち「経済の離床」に関する議論を行なったのがポランニーである

(例えば［ポランニー（1975)］)。このような離床，すなわち，ある領域（例えば経済）が別の大きな領域（例えば社会）から独立するさまを，総合的に説明しようとした，とりわけ言語論的的観点から説明しようとしたのがわたしの離床議論である。「言語論的」と言うのは，離床を言語ゲーム間の関係として把握することを言う。端的に言えば，離床で問題となる経済や社会などの「領域」を，言語ゲームの領域として見ていこうということである。「伝統」という言葉で，わたしはある種の社会（「伝統社会」）を意味するのではなく，ある種の言語ゲームを意味するのである。そして，「近代」という言葉で，ある種の社会（「近代社会」）を意味するのではなく，ある種の言語ゲームを意味するのである。

私の離床議論のポイントを，比較に関連させながら，順を追って説明していこう。原論文では，(1)自然の生活世界からの離床，(2)個人の共同体からの離床，(3)身体の人格からの離床，そして(4)経済の社会からの離床について述べた。ここでは自然と経済に議論を限定する。

2.2 自然の離床 —— 博物学の誕生

自然の領域における離床は，主体と客体の分離，あるいは日常的像と科学的像の分離［セラーズ（2006)］，という形で古くから哲学の議論となっている。フッサールは『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』［フッサール（1974，1954)］の中でこの問題を扱っている。彼は，ガリレイやデカルトに始まる数量化こそが主体と客体の分裂を起こしたのだ，と結論する。これに対し，大森荘蔵［大森（1994)］は別の原因が，一方で数量化を起こし，もう一方で主体と客体の分離を引き起こした，と考える。彼はロック［ロック（1980，1690)］の展開する，物質の性質の「第一性質」と「第二性質」への分離の議論に注目する。第一性質とは，物そのものが持つ性質である —— 大きさ，重さ，あるいは速さなどの性質を言う。第二性質とは，人間が介在して始めて存在する物の性質である —— 色，匂いなどの性質を言う。大森の言うところの「略画」の世界（あるいは「日常的像」）が，近代の「密画」の世界（「科学的像」）へと転換したのは，物質の第一性質だけで物質が記述し尽くされるというデカルト，ガリレイの錯誤によるものなのだ，と大森は結論する。物質の二つの性質の分離，そして一方（第一性質）がもう一方（第二性質）より重要であるという考え方こそが，数量化を呼び，そして主体と客体の分離をうながしたのである。

大森の議論を言語論的に読み替えると次のようになる。文化には第一性質を記述する述語群がある。これを「第一述語」と呼ぼう。そして第二性質を記述する述語群があり，それを「第二述語」と呼ぶ。近代化とは，第一述語をもって，第二述語より重要とする考え方であり，近代の錯誤とは第二述語を使わずに第一述語のみをもって物質を記述し尽くし得るという考え方である。このような第一述語による密画的な記述の企てこそが，

科学による普遍的な（と主張される）数量化を生み出したのである。

かくして，博物学の方法のひとつ，フーコーの言う「体系」が完成するのである。「十七世紀以来，観察というものは，ある種のものを体系的に除外することを条件とする感覚的認識となったのだ。伝聞の排除は当然のこととして，味や風味もまた排除される。それらは不確実で変りやすく，だれも容認されるような判明な要素への分析を許さないからである。…そして，明証性と延長の感覚であり，したがって，万人に容認されるように，対象を《各部分（パルテス）がたがいに他（エクストラ・）の部分の外部（パルテス）にある》ように分析する感覚にほかならぬ視覚に，ほとんど独占的な特権があたえられる」［フーコー（1974）：155］ことになったのである。観察による記述から第二述語が排除されていったのである。例えば，リンネの博物学において，対象は四つの属性（数，位置，比率，量）のみを持つものとなった［フーコー（1974）：157］。博物学の第一述語だけによる感覚的認識は，種の独自性を許さない［フーコー（1974）：167］。それはつねに他の種との比較の中にのみ，すなわち全体の布置の中における自らの位置としての意味を見出すのである。博物学のエピステーメーは比較にもたれかかったエピステーメーなのである。

2.3 経済の離床 —— 合理性の誕生

かつて経済は社会に埋め込まれていたとポランニーは語る。経済が社会から離床した現実を生きているわれわれに「経済」として映る行為は，伝統社会においてさまざまな非経済的な契機をそこに含む。「社会に埋め込まれた経済」は，あるときは「贈与交換」（たとえば，［Mauss（1990，1950）］）と呼ばれ，あるときは「モラルエコノミー」（［Thompson（1971）］，［Scott（1976）］）と呼ばれることになる。ジャワの農民の一見（経済的な行為として見ると）非合理な行為は，彼らの社会の中に埋め込むことで，理解されうるのである［ギアーツ（2001，1963）］。

このような経済領域の独立していない伝統社会が，経済の離床した社会へ変化する，というのがポランニーの描く世界史である。ポランニーは，現代の世界を特徴づける自己調整市場の誕生，彼の言うところの「大転換」［ポラニー（1957）］を，16世紀から17世紀のヨーロッパに求める。イギリスで起きた囲いこみによって，労働と土地が擬制として商品化される。労働と土地の商品化こそが「自己調整市場」を生むことになる，とポランニーは言う。社会や親族，宗教，政治などを考慮しないで，経済合理性にのみ照らせば理解できる行為の一範疇，経済的行為，が独立したのである。そのような行為は親族，宗教，政治から独立している —— 経済が社会から離床したのである。

言語論的な展開は以上の議論を次のように読み替える —— 経済の離床とは，贈与述語群 —— それには多くの社会関係，宗教，政治等の領域を示す述語が含まれる —— を市場述語群 ——「最大の利益」，「最小の損失」，「希少な資源」「コストパフォーマンス」など —— で置き換えてすべてを語る，そのような語り口なのである，と。社会的な事象は，

市場述語群，すなわち経済学による数量化によって普遍的な形――大森風に言えば「経済学的密画」――で記述し尽くされることとなったのである。例えば，組織体の記述・報告において，市場述語のみが許される用語となるのだ。そのような経済学的密画の目標とするものは，組織の「合理性」の計測なのである。

経済学的密画が「有限個の，それもかなり限られた数の特質を選べ，その恒常性や変化をすべての個体において研究する」［フーコー（1974）：162］比較の方法と組み合わされたとき，「進歩」の概念が，そして「近代化論」が誕生する。それぞれの国家という組織は，そのGNPという属性のみにより計測される。その属性のもとに比較された国家は，「開発」の度合のもとに縦に並べられるのだ。ある組織（国家）はより「進歩」し，ある組織はその度合が低い，すなわち開発を必要としているのである――「低開発国」が発明されるのである［原（1998）］。

2.4 近代化――還元の野望

自然の領域における第二述語，経済の領域における贈与述語を，わたしは「大きい述語」と名付けた。同様に，第一述語，市場述語を「小さい述語」と名付けた[2)]。大きい述語群に関する二つの注意点を，わたしは論文の中で繰り返し指摘した。一つは，対応する小さい述語群が一つの独立した領域（例えば「自然」あるいは「経済」）を形成するからと言って，大きい述語群がそれに対応した領域を形成すると考えてはならない，ということである。一つの文化の中の大きい述語群は，すべて関連しあっているのだ――たとえ対応する小さい述語群が「自然」であるとか，「身体」であるとか，あるいは「経済」であるとかの領域を構成しようとも，である。大きい述語群が全体として描きだすものこそ，モースの言わゆる「全体的社会事実」［Mauss（1990，1950）］なのである。

第二点は，第一点と密接に関連しているのだが，ある文化の大きい述語の一つを，他の文化の述語に翻訳はできない，という点である。比較可能なのは，その全体性，全体的社会事実であって，それを構成する一つの一つの述語ではないのである。

近代の野望とは，大きな述語を過不足なく小さな述語に翻訳することである。それは，すなわち，「還元」の野望である。そうすることによって，直前の段落で私が述べたこと，「全体性」と「翻訳不可能性」の双方を克服しようとすること，これが近代化なのである。

この意味での近代化が間違っていること，大きな述語の小さな述語への還元が不可能であることを，わたしは当該の論文［中川（2008）］の中で証明した。

近代化とは，すくなくとも私の言葉使いの中での「近代化」とは，このような間違った状況を言う。大きい記述の編み出す全体的社会事実は，飽くまで，翻訳不可能であるのだ，ということである。少なくとも，それを小さい記述に還元して，単純に翻訳することは，言い換えれば，単純に比較することは，できないのである。

3 近代の博物学 ── 監査

『文化人類学』第73巻第4号の特集は，「アカウンタビリティ」である。特集の序文で森田敦郎は「監査文化」のキーワードである「説明責任」と訳されるアカウンタビリティと，エスノメソドロジーの中のアカウンタビリティとを関連づける。森田は，「横断歩道の前できょろきょろする人間」を，別の人が「横断歩道を渡ろうとする人間」と記述あるいは報告する例を出して，アカウンタビリティの説明を始める ── 「エスノメソドロジーは，このように場面を秩序だったものとして見たり組織化したりする方法に焦点を当ててきた。彼らによれば，社会的秩序の源泉は，人々が相互行為ないし実践をとおしてものごとをアカウンタブルなものに，つまり目で見て理解可能で報告可能な形に組織化する方法にある」［森田（2008）］と。

エスノメソドロジーや，『文化人類学』の特集の論文が扱うアカウンタビリティの例には，とりたてて有害なものは見いだせない。それらの事例が描き出す世界では，記述する者の記述あるいは報告を，記述された者がすぐさま受け入れる，そのような場が想定されているからだ。アカウンタビリティが有害となるのは，場の共有されていないような状況である。もともと理念の違う大阪大学と国立民族学博物館とを，共通に，「目で見て理解可能で報告可能な形に組織化する方法」，少なくとも単純な方法はない。その二つを無理矢理に共通の判断基準（スタンダード）をもって理解可能，読解可能（legible）［Scott (1998)］にするのが（そしてフーコーディアンなら言うであろう ── 「統治可能」にするのが），監査であり，とりわけ，アカウンタビリティの概念なのである。

3.1 言語ゲーム ── 大きなアカウンタビリティ

この「場」を静的な「言語ゲーム」で説明することは，「秩序の源泉を行為者の背後にある事前に決定されたプログラム」［森田（2008）］ではなく，「実践の技法」［森田（2008）］に求める『文化人類学』の特集号の論者たち，あるいはエスノメソドロジーの論者たちには受け入れがたいことであろう。ここにおいて，私の議論は，しばしエスノメソドロジーから離れる ── わたしは「事前に決定されたプログラム」，言語ゲームを想定しているのだから。

わたしの近代化論は，とりわけてアカウンタビリティをめぐる近代化論は，近代化を「言語ゲーム間の軋轢」の一つとして捉えることである。

「言語ゲームの間の軋轢」は，野矢茂樹の言う「アスペクトゲーム」を拡張した概念である。野矢は，まず，ウサギ・アヒルの図を用いた（ウィットゲンシュタイン以来の）アスペクトの説明を行なう。野矢のポイントは，このアスペクトの説明の中で行なわれたであろう会話に焦点を置くことである。実験が始まったばかりの状況では，被験者は「これはアヒルである」と語るであろう。しかし，他の被験者が「これはウサギである」

と語るのを聞くに至り，最初の被験者は，その発言の仕方を「アヒルに見える」と変えていくこととなる。野矢が注目するのはこの二番目の種類の発言「アヒルに見える」という発言である。この発言は，もう一つのアスペクト，「ウサギ」を念頭においた語り方である。このような状況を，野矢は「複相状況」と呼び，その状況での会話を「アスペクト・ゲーム」と呼ぶ。それはコミュニケーションの方法自体に問題が起きた状態であると言うのである［野矢（1995)］。

アスペクト・ゲームの会話を次のようにより詳細にすることが可能であろう ── 「彼は『これはウサギである』と信じているが，わたしにはこれはアヒルに見える」と。これは浜本満［浜本（2007)］の描く信念文の現出する状況である。異文化を記述する人類学者は，自分が見ている以外のアスペクトを描く際に，いやおうなしに複相状況に陥るのである。「ドゥルマ人は『これがウサギである』と信じている」と。人類学者の報告は，信念文，すなわち，アスペクトゲームの文体を取らざるを得ないのだ。

浜本満の議論は，アスペクト・ゲームを拡張するヒントとなる。すなわち，言語ゲーム（あるいは文化）こそがアスペクトを生み出すものであるのだ。浜本まり子［浜本（1995)］は，在日韓国人が巻き込まれる言語ゲーム間の軋轢の例を描き出す。彼女の出す事例をアスペクト・ゲームとして描けば次のようになるだろう ── 一人はある行為を「名前を名乗る」と記述し，もう一人は同じ行為を「日本名を名乗る」と記述するのだ。問題になっているのは，単なるアスペクトではないこと，それが言語ゲームの軋轢であることを彼女の議論は強調している。その場では，それまでの日常の言語ゲームと在日韓国人の運動の言語ゲームとの軋轢が問題になっているのだ。「日本名を名乗ること」は，すなわち「本名（韓国名）を名乗らないこと」であり，運動への裏切りであるのだ。在日韓国人の運動に取り込まれたとき，「名を名乗る」という記述・報告は取り下げられ，その行為は，その運動の内部者にとってアカウンタブルなもの，「横断歩道を渡ろうとしている」と同じ程度にアカウンタブルな「日本名を名乗る」という記述に読み替えられるのである。すなわち，行為は，「目で見て理解可能で報告可能な形に組織化」されたものとなったのだ。

言語ゲームとは大きい述語の束である。言語ゲームの軋轢とは，ある現象を取り込むべき言語ゲームが二つあるときに起きるのだ。会議の中で，ある提案に対しての疑問を質すための挙手が，その提案に対しての賛成票に数えられた状況を考えてみよう。小さな記述で「手を挙げる」と記述されるような行為が，投票ゲームの中で「賛成の表明をした」となり，会議ゲームの中で「質問の表明をした」となるのだ。これが「言語ゲームの軋轢」という言葉でわたしが意味する状況である。

このような意味でのアカウントは，「── と見なす」の意味の「カウント」から派生している。「手を挙げることは賛成の意志表明とカウントされる」という，投票ゲームの構成的規則［Searle (1969)］に重ねられることこそが（エスノメソドロジーの用語として

の）アカウンタビリティのエッセンスなのである。エスノメソドロジーの主張するアカウンタビリティを「大きな述語によるアカウンタビリティ」あるいは「大きなアカウンタビリティ」と呼ぶことに不都合はないであろう。

3.2 世界の近代化――小さなアカウンタビリティ

言語ゲームの共有される場では，アカウンタビリティとは社会の秩序を構成するものである。実践者たちが秩序を作ろうとしている場では，共有される大きな述語が捜されるのである。「横断歩道の前できょろきょろする」という小さな記述から，「横断歩道を渡ろうとする」という大きな記述へと変換すること，そこに同意を探ること，これがアカウンタビリティの顕現の原理である。しかし，言語ゲームが共有されていないとき，一方の側から強制的にアカウンタビリティを生み出そうとする行為は，軋轢の場を生み出すのである。

現代の世界で，すなわち近代化のなかで，重要性を帯びてきた（監査文化の用語としての）アカウンタビリティと，エスノメソドロジーのアカウンタビリティの相違を見極めるべきである。相違は次の点にある――近代化の中のアカウンタビリティ，すなわち，監査文化の中のアカウンタビリティは，すべてを小さい記述へと還元しようとする動きなのだ，という点である。この場合のアカウントは，「数える」の「カウント」に由来すると考えることが理解を助けるであろう。駄洒落ではないが，監査文化のアカウンタビリティの標語は，「カウントする（数える）ことがカウントされる（重要なのだ）」。エスノメソドロジーの用語の「アカウンタビリティ」を「大きなアカウンタビリティ」と呼んだことに対応させて，監査文化の中の「アカウンタビリティ」を「小さなアカウンタビリティ」と呼びたい。

近代化，その頂上にある監査文化の目標とするものは「合理性」と呼ばれる。この場合の「合理性」の「理」は，特殊な理である――それは経済主義の中の理のみを対象とする合理性なのである。「経済合理性は，明確に希少な手段を想定している。しかし，人間社会にはそれ以上のものが含まれる」［ポランニー（1980，1977）：49］にも関わらず，「合理性」という語は経済主義の中の合理性にのみ適用されるのだ。監査文化のアカウンタビリティは大きな述語ではなく，小さな述語（市場述語群）から構成されているのである。

果たして，ハーバーマス［ハーバーマス（1986）］がウェーバーを批判して言うように，合理化を行為の合理化とシステムの合理化とに分けるべきだと言うべきなのか，それとも行為に関する「合理性」の語がいつのまにか組織の論理にすべり込んできたのかはともかく，現在の世界で，組織はつねに合理性のもとに評価される。ポランニー［ポランニー（1980，1977）］は合理性に関しての新しい二つの意味について述べている――一つは目的についての功利主義的価値尺度，もう一つは手段についての効果を科学的に

判断する尺度とである。かくしてすべての組織は，その目的が功利主義的な用語で記述され，その目的に対しての手段の効果が「科学的」に評価されることとなる。すべてが小さい述語において記述され直されるのだ。評価，監査の中で，科学性は数字の使用に示されるようになる ── 数字が「客観性」の証拠とされるようになる［Harper (2000)：48］のである。

功利主義的な目的を持つ組織を，「コストパフォーマンス」等の小さい述語群（市場述語群）をもって記述し，組織をアカウンタブルなものにすることに問題はない。アカウンタブルにされた組織体（あるいは「還元された組織体」）は，その記述，報告を受け入れるのであるから。それらの組織体同士が，そのような形で比較され，順位づけがされることにも問題はない。場は共有されているのである。それらの組織の間では，ポランニーの言う「経済の社会からの離床」── すべての社会的事象は小さい述語群，すなわち市場述語群によって過不足なく記述される，という考え方が共有されているのである。

しかしながら，功利主義的な目的を持たぬ組織体，例えば「審美的，倫理的あるいは哲学的」［ポランニー（1980，1977）：49］な目的を持つ組織体，たとえば大学に，コストパフォーマンス等の市場述語群によって記述された基準があてられる時には，軋轢が起こるのだ。

3.3 大学の近代化 ── 代替可能性

十七世紀のエピステーメーの変容により，「動植物界の全領域は碁盤目状に区分され，それぞれの群に名があたえられる」［フーコー（1974）：164］こととなったように，大学もまた，監査文化の中で，碁盤目状に区分される。教員はその業績数，賞の数，外部資金獲得回数，科研申請回数，等々の属性によって，そしてその属性のみによって，同僚の教員とともに碁盤目状のリストの中に布置される。教員の表（タブロー）［フーコー（1974）］は，学部の表の一部を占める。学部の評価表（タブロー）の中で，教員の表（タブロー）に加えて，学生数，教室数，その他の属性の「数，位置，比率，量」が，リンネ博物学の対象よろしく記述される。大学の評価表は，さらにその他の碁盤目を埋められ，他大学と比較されることとなるのだ。これらの「評価」を可能にするのが，「経験のなかにひとつの可能な知の場を切りとり，そこにあらわれる対象の存在様態を規定し，…物に関して真実と認められる言説（ディスクール）を述べうるための諸条件を規定する」［フーコー（1974）：181］エピステーメーなのである。

大学の当事者たちは，大学という制度が市場述語群だけで過不足なく記述し尽くされるとは考えていない。そう考えているのは，監査を行なう機関である。マリリン・ストラザーンたちの描く監査文化のただ中の大学の苦悩［Strathern (2000a)］は，映画『ソフィの選択』の中の登場人物の苦悩に重ねることができるだろう。そこでは，二人の子供を，（ナチスによって）無理矢理に比較させられる親の苦悩が描かれれる。贈与述語で

描かれる社会関係の中で，一人一人の人間は代替不可能な（「かけがえのない」），比較不可能な人間である。お手伝いをしてくれた子供にお駄賃をあげるとき，親は，子供の貢献を市場述語で記述してはいない。お駄賃のゲームでは「わたしにとってのかけがえのない子供」に贈与が行なわれているのだ。アルバイトに給料を渡す雇用者は，問題となっている社会関係を市場述語で記述する。給料のゲームでは「わたしにとっていつでも取り替えのできるアルバイト」に給料が払われているのである。不況の中，解雇を選択せざるを得ない雇用者に『ソフィの選択』の苦悩はない。被雇用者は，能力，要求する給料の金額等の属性に還元され，その属性の表の中で容易に比較可能である。決断は「合理的」に遂行される。

子供，そして付け加えるならば，友人が，比較不可能・還元不可能なように［Espeland (1998) : 30］，大学もまた，本来，比較不可能であったのだ。複数の言語ゲームの軋轢があり，監査文化の言語ゲームが勝ちを収めるのだ。

4 伝統の博物学 ── 類化

近代と出会うとき，伝統が経験するものもまた，この言語ゲームの軋轢である。一つ一つの伝統は，自らのアカウンタビリティ（科学および経済学による「普遍的」であるところの小さな述語群による記述）を唯一のアカウンタビリティと主張する近代との軋轢を経験するのである。たいていの場合，ここには森田の強調する「論争」［森田 (2008)］はない。「より力の強い人々がそれを通してさまざまな社会文化的な集団がコミュニケートし，互いに争うための共通の次元を設定」［Errington and Gewertz (2001) : 508］するのである。その軋轢が，近代の勝利に終わるとき，文化の持つ大きな述語は，小さな述語へと還元されるのである ── 文化は（近代の言語ゲームの中で）アカウンタブルなものとなり，比較可能になり，読解可能なものとなるのである。

4.1 先住民の知恵 ── 文化の解体

典型的な例として「先住民の知恵」をめぐる事例を挙げることができるだろう。

「先住民の知恵」概念を袋小路の人類学を救う考え方として絶賛するポール・シリトーは，ネパールの先住民の知恵を褒めたたえる。ネパールの人びとは，そこに生えている木の葉の形が，土壌の侵食と深い関係があることに気がついていたのだ［Sillitoe (1998) : 227］。この考え方の正しさは，科学が後に検証することとなったことをシリトーは付記する。

ロイ・エレンは，シリトーの論文へのコメント［Ellen (1998)］の中で，正しくも，先住民の知識として取り出された断片が，文化の他の部分から切り離された断片である恐れについて述べている［Ellen (1998) : 238］。そして，じっさい「先住民」たちは知識の

切り売りを始めているのである――その知識を自ら，単純化し，変容させて市場へと売りに出しているのである［Ellen (1998) : 238］。近代は，「記述が細心に並列する諸要素のうち，いくつかのものだけを取りあげ」，「特権的構造に関係のないすべての相違や同一性を故意に無視する」［フーコー（1974）：163］のだ。たしかに，エレンが危惧するように，「全体的社会事実」を強調することは文化人類学者の縄張り主張のように聞こえるかもしれない。それは，文化ブローカーの先取権の主張と非難されるかもしれない。しかし，その危険は敢えて犯すべきものである，とわたしは考える。さもなくば伝統社会は，博物学者の視線の中で，碁盤目状のグリッドの中での分類を待つ標本のようになってしまうであろう。敢えて挑戦的な喩えを用いれば，「先住民の知恵」の文脈で，伝統社会は，医者によって使用される臓器を吟味され，解体を待つ「生きた死体」のような存在となってしまうであろう。

ヘンリー・デルコア［Delcore (2004)］は，先住民の知恵を，エリントンとゲヴァーツ［Errington and Gewertz (2001)］の言う「類化」(generification）の一例であると主張する。彼によれば，先住民の知恵とは「共通の差異の構造」［Wilk (1995)］を通じて，ローカルな手段を，ナショナルな，そしてインターナショナルな舞台で理解可能にするものであるのだ［Delcore (2004) : 7］。

以下，類化の概念を明瞭化すべくデルコアによって挙げられたいくつかの論文をサーベイしていくこととしよう。

4.2 インド――文化の客体化

バーナード・コーンは植民地期インドにおける「文化の客体化」について述べる［Cohn (1987)］。彼の注目するのは，「国家（ステート）の学」，統計（スタティスティックス）［原（1998）：69］が果たした，インド人のアイデンティティ形成の中の役割である。十九世紀末，統計作成のための資料の採取をイギリス人により命じられたインド人のエリートたちは，人口を数え，カーストを分類しようとする。それらの企ての中で，彼らは文化をモノとして扱うようになっていったのである。「彼らは一歩はなれて自分自身を，自分自身の理想を，象徴を，文化を眺め，それを一つの実体として見る。それまで習慣，儀礼，宗教的象徴，テキストを通じて伝承された伝統といったもののマトリックスの中に埋め込まれていたものが，なにか違ったものとして見えるようになったのだ」［Cohn (1987) : 229］。主体の中に埋め込まれいたものが，分離し，客体として記述が可能となっていったのだ。1931年に至ると，ひとつの民族運動（アーリヤ・サマージ）は，統計の積極的な活用をはかるまでになる。例えば，「統計の『カーストは？』という質問には『なし』と書け」といった統計への答え方を，彼らは住民に指導していったのである［Cohn (1987) : 250］。一握りのイギリス人の知的興味から始まった統計作りの作業が，インド人に現在まで続く文化的な運動，西洋の影響に抗する運動を形作ったのである［Cohn (1987) : 250］。

4.3 ベリーズ── 文化の展覧会

コーンの文化の客体化論を背景として，リチャード・ウィルクは，中米の小国ベリーズを舞台に展開されるグローバリゼーションについて議論する。それは単純にグローバルがヘゲモニーを取るという議論ではない。ローカルであるものは，グローバルな秩序のもとにあるという条件のもとにローカルであることができるのである。そのメカニズムは一種の文化の客体化である。彼は，それを「共通した差異の構造」と呼び［Wilk (1995) : 111］，コーンの議論をさらに精緻にしていく。そのメカニズムは，共約可能性に基く，すなわち，比較可能な差異の構造の産出のメカニズムである。ベリーズの文化は，それ自身としての個性，ローカル性を主張するのではなく，あくまで「共通した差異の構造」というグローバルな表（タブロー）の中に配置されることにより，比較可能な，共約可能な差異をのみ主張するのである。

かつて，十六世紀までは，「それぞれの種はそれ自体によって自己を示し，他のあらゆる種とは無関係に自己の個別性を言表した」［フーコー（1974）：167］という。しかし，十七世紀の博物学において，個別性は姿を消し，種は，他の種との同一性あるいは差異性の中にのみ自らの意味を見出すこととなった。ウィルクの描く「共通の差異の構造」においては，ローカルな文化は，その個別性を主張する権利は剥奪されている。ローカルな文化は，他の文化との間の同一性と差異性の表（タブロー），すなわち，グローバルという秩序の中でのみその位置を主張できるのである。

コーンの議論との対照を把握するためにも，わたしたちは，ウィルクの論文の題名「ローカルになるべく学ぶ」（“Learning to be Local”）に留意すべきである。題名が示唆しているのはポール・ウィリスの本，『働くべく学ぶ』（*Learning to Labour*）（邦題『ハマータウンの野郎ども』）［ウィリス P. (1996)］との照応である。ウィリスは，ハマータウンの学校でのフィールドワークに基き，労働者階級の生徒たちの不良ぶり，体制への反抗を生き生きと描きだす。この部分の描写を，コーンによるイギリスの統治に反抗するインド人による民族運動と重ねることは可能である。しかし，労働者階級の生徒たちによる体制への反抗はウィリスの議論の序曲でしかない。彼が導く結論は，それらの反抗を通して，彼ら労働者階級の生徒たちは，皮肉なことに，彼らが反抗している当のものであるところの体制，すなわち，階級構造，それの再生産に寄与している，というものである。ウィルクの題名が運ぶメッセージは，次のようなものであろう。ローカルな住民による文化の客体化の運動は，それ自体，グローバルな秩序への反抗の事例，「OK。彼らはそれを流用している」学派（“It’s All Right. They’ve Appropriated It” school）［Wilk (1995) : 115］の喜びそうな事例かもしれない。しかし，それらの運動の帰結は，ローカルのグローバル秩序への組み込みに他ならないのだ。

4.4 チャンブリ ── 文化の目録

より悲観的な報告がエリントンとゲヴァーツによってなされる。パプアニューギニア，セピック川流域のチャンブリの事例である。エリントンとゲヴァーツは，三つの事例を通じて，チャンブリがいかにして，力の強い外部者（政府の役人，NGO の決定権を持つ人々，ツーリスト，調査者）に対して，自らを翻訳可能な，読解可能な，比較可能な形で，ひとことで言えば総称的な（generic）ものとして提示せざるを得なくなっているかを描写する。チャンブリたちがそのような場において自らを提示する際に採用するメカニズムこそが，「共通の差異の構造」である。エリントンとゲヴァーツは，それを「ジェネリフィケーション」（「類化」と訳すこととする）と呼ぶ。

警官の暴力により，儀礼家屋が破壊された ── その破壊を，文化財保護局に訴える事例が第二の事例である。彼らは破壊の様子をレポートに書く。レポートの一つは，破壊された文化財の目録の作成となる。目録の作成は，各アイテムの種類，名前，記述と，その推定市場価格との表となる。チャンブリたちは，彼らの儀礼家屋が，けっきょく，一連のリストと，市場価格の総額に還元されてしまったことに驚くのである［Errington and Gewertz（2001）: 518］。力のある他者と交渉するためには，チャンブリの文化は脱領域化され，一般性を獲得しなければならなかったのである。このような類化のプロセスはチャンブリに限られたものではない。パプアニューギニアにおいて，力を持つ国家や資本主義の使者たちが，800もの多様な文化を読解可能なものとしているのである。この作業には特殊な翻訳が必要となる。この翻訳は文化的な類化によって行なわれるのだ。文化的な類化によって，文化的な特殊は，文化的な一般に翻訳されるか，さもなくば，文化的な特殊の一般的な事例に翻訳されることとなるのである［Errington and Gewertz（2001）: 510］。

チャンブリの儀礼家屋が碁盤目状の表（タブロー）に還元され，チャンブリ自身もまた表に還元されるのだ。そして，最終的には，パプアニューギニアの諸民族が，類化を通じて，碁盤目状の表に還元されていくのである。

5 エピローグ ── エンデ県知事選挙

2008年 9 月，わたしは再びフローレス島にいた。行政都市問題は，何ら進展を見ないまま，村人たちにとってはすでに過去の話題となっていた。その年のズパドリ村での熱い話題は，県知事選であった。県知事が住民による直接投票により選ばれることになってから村が最初に経験する選挙である。昨年の行政都市問題の時ほどではないにしても，村人はこの新しい経験を楽しんでいた。全部で七つの知事・副知事候補のペア（「パケット」と呼ばれていた）が立候補しており，積極的に選挙運動を展開していた。リオ人の絶対的な人口の多さ，および相対的な役職人口の多さから当然ではあったが，七人の知

事候補者のうちの六人がリオ人であり，エンデ人の候補者は一名のみであった。ズパドリ村の選挙に興味のある人のすべてがエンデ人の候補者を推していたわけではなかったが（ここでもそれぞれのパケットを応援する様々な語り方がされていた），かなりの人数がエンデ人の知事のパケットを応援していたのは印象的であった。もちろん，応援の理由は「エンデ人ならば，エンデ人の県知事を応援するのは当たりまえだ」ということである。エンデ人対リオ人の対立は，もはや，当り前のこととされていたのである。

かくしてズパドリ村の「エンデ人」たちは，ますます，リオ人との対照の中で自らの特殊性を主張することとなるのである。その特殊性は，しかしながら，あくまで近代にとって読解可能な特殊性，すなわち，「文化的特殊の一般例」［Errington and Gewertz (2001) : 509］でしかないのである。

＊　＊　＊　＊　＊

わたしは，調査のテーマ[3]である「文化の世代間継承」に関連した小学校の授業科目である「地方文化」（Muatan Lokal）の資料を，村の学校でいくつか入手した。その資料を持ってエンデの町へ行き，知合いの家に泊まった。彼はズパドリ村の出身であり，ここ数年，活発に政治活動を行なっている男であった。もちろんエンデの町が行政都市になる時も活動していたし，今回の県知事選でもエンデ人の知事候補を支持する活発な選挙運動を展開していた。わたしは，村で入手した「地方文化」の教科書の一つを彼に見せた。それは，エンデ県の文化教育省の作成によるリオ語の教科書であった。たいへんに美しい装幀の教科書であり，わたしは彼の賞賛を期待していた。彼の激しい反応はわたしを驚かせた。「なぜ村の教員たちはこんなリオ語の教科書などを使用するのだ。エンデ人はエンデ語の教科書を使用すべきだ」と言うのである。エンデ人が，リオ人に対抗してエンデの文化を標榜するためには，言語の独立は（たとえ，それが方言レベルの差異しか示さないものだとしても）必要不可欠なものだ，というわけである。

「地方自治」という美名のもとに，ムッカル（行政単位の分立）を通して細分されてゆくフローレス島の行政区分地図は，まるで碁盤目状の認識の地図を世界に投影したもののように見えてくる。

注

1）その他に，現県知事が政治的生命の延命を考えたという個人的陰謀説，ムスリムたちがエンデの町を自分のものとしようとしているという宗教対立説，等々，いくつもの語り方がされている。

2）この用語法がわたしの15年前の著作『異文化の語り方』［中川（1992）］の中の用語法に呼応していることを付記しておく。

3）2007年，2008年の調査は海外科学研究費，「文化の世代間継承に関する文化人類学的研究」

（研究代表者鏡味治也）による。

文　献

Cohn, Bernard S.

1987 “The Census, Social Structure and Objectification in South Asia.” In: *An Anthropologist among the Historians and Other Essays*. Oxford: Oxford University Press.

Delcore, Henry D.

2004 “Symbolic Politics or Generification? ― The Ambivalent Implications of Tree Ordinations in the Thai Environmental Movement.” *Journal of Political Ecology* Vol.11 pp.1–32.

Ellen, Roy F.

1998 “Comment to Sillitoe.” *Current Anthropology* Vol.39 No.2 pp.238–239, April.

Errington, Frederick and Deborah Gewertz

2001 “On the Generification of Culture: From Blow Fish to Melanesian.” *The Journal of the Royal Anthropological Institute* Vol.7 No.3 pp.509–525.

Espeland, Wendy Nelson

1998 *The Struggle for Water: Politics, Rationality, and Identity in the American Southwest*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Handler, Richard

1984 “On Sociocultural Discontinuity: Nationalism and Cultural Objectification in Quebec.” *Current Anthropology* Vol.25 No.1 pp.55–71.

Harper, Richard

2000 “The Social Organization of the IMF’s Mission Work: An Examination of International Auditing.” In: Strathern（2000a）pp.21–53.

Mauss, Marcel

1990（1950） *The Gift*: *the Form and Reason for Exchange in Archaic Societies*.: W. W. Nortoan & Company, Inc.

Scott, James C.

1976 *The Moral Economy of Peasant*. New Haven: Yale University Press.

1998 *Seeing Like a State*. New Haven: Yale University Press.

Searle, John R.

1969 *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. London, New York, New Rochelle, Melbourne, Sydney: Cambridge University Press.

Sillitoe, Paul

1998 “The Development of Indigenous Knowledge: A New Applied Anthropology.” *Current Anthropology* Vol.39 No.2 pp.223–252, April.

Strathern, Marilyn（Ed）

2000a *Audit Cultures: Anthropological Studies in Accountability, Ethics, and the Academy*. London and New York: Routledge.

Strathern, Marilyn
2000b "Introduction: New Accountabilities." In: *Audit Cultures: Anthropological Studies in Accountability, Ethics, and the Academy* pp.1-18.
Thompson, E. P.
1971 "The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century." *Past and Present* Vol.50 pp.76-136, Fed.
Wilk, Richard
1995 "Learning to be Local in Belize: Global Systems of Common Difference." In: D. Miller (Ed) *Worlds Apart: Modernity through the Prism of he Local*. pp.110-133 London: Routledge.
ウィリス，P. E.
1996 『ハマータウンの野郎ども』(ちくま学芸文庫)，筑摩書房.（熊沢誠・山田潤訳).
大森荘蔵
1994 『知の構築とその呪縛』(ちくま学芸文庫)，筑摩書房.
ギアーツ，C.
2001(1963) 『インボリューション ── 内に向かう発展』，NTT 出版.（池本幸生訳).
セラーズ，W.
2006 『経験論と心の哲学』，勁草書房.（神野慧一郎・土屋純一・中才敏郎訳).
デュモン，L.
1993(1983) 『個人主義論考 ── 近代イデオロギーについての人類学的展望』，言叢社.（渡辺公三・浅野房一訳.
中川　敏
1992 『異文化の語り方 ── あるいは猫好きのための人類学入門』，世界思想社.
2008 「コスモスからピュシスへ ── 人類学的近代論の試み」『文化人類学』第72巻第 4 号 466-484頁，4 月.
野矢茂樹
1995 『心と他者』，勁草書房.
ハーバマス，J.
1986 『コミュニケイション的行為の理論（中)』，未来社.（藤沢賢一郎訳).
浜本まり子
1995 「人はいかにして自らが生まれ育った場所で異邦人たりうるか ── 在日朝鮮人の名のりの問題」中内敏雄・長島信弘（編)『社会規範 ── タブーと褒章』，藤原書店　85-112頁.
浜本　満
2007 「他者の信念を記述すること ── 人類学における一つの擬似問題とその解消試案」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 9 巻　53-70頁.
原洋之介
1998 「現代の開発思想」川田順造・岩井克人・鴨武彦・恒川恵市・原洋之介・山内昌之（編)『地球の環境と開発』，岩波書店　61-82頁.
フーコー，M.
1974 『言葉と物 ── 人文科学の考古学』，新潮社.（渡部一民・佐々木明訳).
フッサール，E.
1974(1954) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』，中央公論社.（細谷恒夫・木田元訳).

ポラニー，K.
1957 『大転換 ── 市場社会の形成と崩壊』，東洋経済新報社，（吉沢英成訳）.
ポランニー，K.
1975 『経済の文明史』，日本経済新聞社，（玉野井芳郎・平野健一朗訳）.
1980（1977）『人間の経済 I ── 市場社会の虚構性』（岩波現代選書），岩波書店.（玉野井芳郎・栗本慎一郎訳）.
森田敦郎
2008 「特集「アカウンタビリティ」序」『文化人類学』第73巻 4 頁.
ロック，J.
1980（1690）「人間知性論」大槻春彦（編）『ロックヒューム』第32巻（世界の名著），中央公論社 61–188頁.